

平町 ● 乾杯群社

五 號

乾杯群

草野心平・私と私の蛙

三野混沌・新田

中野勇雄・象景

楠田重子・春のひと日

段塚青一・私の小猫

小林直人・展望



私と私の蛙

草野心平

寒いね
もつとこつちに寄らないか
月があかるすぎるかい

冬・口笛

ふるひながら一点をゆり上げてつて

——圓錐形なる空

新田

三野混沌

おなじ畑のなつばを
みんなでたべ

その一きれのなつばでおれは

性盡だ

おう

ひとつ畑だ

地べたにひつつけられた
その面がい、

すなはな。

象景

中野勇雄

深夜 推積した雪の影 ゆれ崩れ
犬は狂獺な灯射す三昧の音に憑かれて走る

坂・だんだら斜光・飛沫を食ひ——

深夜 青銅の微に呻される時計
ばんばり燃え崩れ 金ペンはじけ・音譜

さくさくさくさくさくさくさく

鏡あり 犬は氷つて標札となる

白亜石・

暗・褐色のカーテン垂れ

さくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさく 白狐の毛並を——撫でる

戀人よ

石のやうにこたわつた情緒にひきづられて
あなたへの戀心はもうタンポポの毛となり
秋風は流されて行つて了つた

茫漠——こした地球の裏側の昨日よ
流車が野原の樂器を奏でる刻々 垂れ下つた雲を

たぐつてる山々に眼を投げ——

私は鳥か 一本の枯木か それとも吐出された白銅
の月か

——あなたは塵捨場の跛行豚か

漠漠と泣き膨れた純情の毛蟲は

穴のあいた南京袋に巢をくつて了つたのだ
戀人よ——

曇天五篇

● 梢さんがり
みるみる太くなる——骸

● 鏡の中で自分の顔を見失ふ

● 電線を傳つて

● 獸性——
びくびく びくびく

● 皿いちめんの糊である

● 火のない火鉢——
灰がうごいてゐる

春のひと日

楠田重子

細胞は
尖り——尖りなりに
いくらでも睡眠がほしい
じつと汗ばむ視線は
流場の隅々や
滯つた泥溝の中をはじくりたがる

仰向けに踏み潰された

死蛇は

陽炎の中に未だなま／＼しく

……………あゝ

それに そこの落髪よ——

生蒼く

生臭く

(あゝ何だらう)

這ひ廻り 這ひ廻り

この室内

而して

いくらでも睡眠がほしい

うご／＼ うご／＼

私の小貓

段塚青一

温上りの爪をつんでゐるこ
金柑のやうな寂しさが湧くものだ
ニッケル鍍金の鉄の音が
餘りにいゝので
私の小貓は
今夜もおごなしく
私の側にちつと黙つて坐つてゐる

展 望 (郊外設計圖)

小 林 直 人

蒼鉛のいめえじが春の展望の丘を登ると空想の合金を堀つてゐる西洋草花だ

練齒磨と羅紗帽を並べた休息台は鉄橋が女になつていゝところがある

ふりじあが都會の裏通りを追ひかけるので黒色れもんでいの散策をうれしがる展望の幼児になる

郊外に吊るされた森林の露台はばれつこの電車で錆びた青草の酸化炭素で液化人形のやうでもある

(たいへん美しい蝶の脚飾りなので 女はふんふんとあそを踏いて行つたのです)

で女はたうとう あの湖の濃青の心臓を盗んで終つたのです

めらんこりあは あの湖の呪ひが化石した鳥なので

でも自動車は毎日 あの草原で朝餐を喰して大笑ひをしてはるかのれでい達を待つてゐますよ)

煙が青い煙突を抜けて黄色人種を招待するのはせるろい

ごのばすけつこのやうなもので

冬眠虫類が女のやうに展望台を覗くのはたのしいやうなものだ

● 後 記 ●

乾 林 群

福島縣平町二丁目に僕と共に移轉

空 友 情

平の空と東京のソラとは續いてゐるんだ 鏡 支那服レコード

五 歩 踏 履

コーヒーの空

電 氣 廣 告

こんな田舎でもそんなにいい花の咲くところか 手と手と手と手と

電 氣 廣 告

チューリップ的追想「空間の垂み」の直径

電 氣 廣 告

「かうし月に怖ゆるのは」 銀 明 四号の廣告

電 氣 廣 告

編輯同人 小林直人 中野勇雄

電 氣 廣 告

● ● ● 受 贈 誌 ● ● ●

電 氣 廣 告

翁行燈觀イリスイム 詩世紀 犀 羅針 詩潮 現示 戒克船

電 氣 廣 告

彼等自身 亞蘭頗 津田 天野 踏旁詩 詩ノ家 (八木氏より)

大正十五年四月一日

福島縣平町二丁目三〇

編輯者 中 野 勇 雄

福島縣平町一丁目

印刷所 高 瀬 活 版 所

(頒 價 5 錢)